

シンポジウム「韓国における視覚研究」の企画経緯報告

東京工業大学 金子寛彦

2000年冬の視覚学会大会、二日目午前中のセッションで、韓国から Chan-Sup Chung 教授 (Yonsei Univ., 延世大学) と Choongkil Lee 教授 (Seoul National Univ., ソウル大学) を招いて、「韓国における視覚研究」と題するミニシンポジウムが開かれた。この中で、Chung 教授は「Vision Science in Korea」という題目で、韓国全体の視覚研究の動向と教授自身の非常に広範囲にわたる研究を紹介され、Lee 教授は、「Roles of head movements for cognitive control in eye-head coordination」という題目で、読書中の頭部と眼球の動きに関する研究について話された。日本と韓国の研究者が交流することは、個人レベルではこれまでもあったと思われるが、視覚学会としてのこのような試みは初めてであり、これが今後の日本と韓国の視覚研究の交流を進めるきっかけになればいいと思われる。本稿では、このミニシンポジウムを企画するに至った経緯について報告する。

事の起こりは、筆者が ATR 人間情報通信研究所在籍中に、韓国の延世大学から来ていた Sung-Bae Cho 先生と同じ居室になったことであった。彼の専門は視覚ではなく進化的アルゴリズムやニューラルネットであったが、人間の認知過程にも興味を持っており、筆者の研究にも関心をよせてくれた。彼に視覚学会のことを話した折りに、韓国での視覚研究事情を尋ねたところ、延世大学でも視覚の研究をしている人がおり、韓国全体にも数は少ないながら元気な若手視覚研究者が何人かいることや、韓国全体では視覚研究に特化したような学会はまだ組織されていないことを聞いた。そして、韓国の視覚研究者が日本視覚学

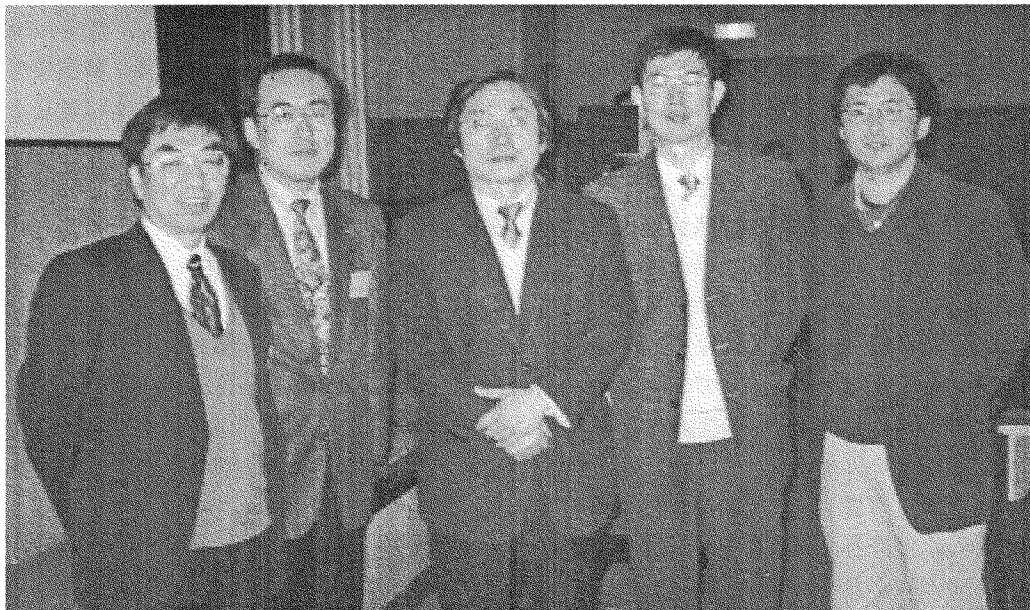
会の存在を知れば、きっと興味を持つに違いない、ということであった。その後、Cho 先生は同じ延世大学で視覚研究をしている Chung 教授 (心理学科) と連絡を取り、筆者を紹介してくれた。すぐに Chung 教授にメールを書き、日本視覚学会のことを話したところ、とても興味を持ってくれ、何か交流ができたらお互いのためになるのではないかということになった。このやりとりと同じ頃に、視覚学会の幹事会にこの話を伝えたところ、是非押し進めるべきだ、という力強い賛同があり、一度韓国を訪問し Chung 先生をはじめ韓国の視覚研究者と会う機会を持つことになった。余談であるが、ほぼ同時期に全く知らなかった韓国の Sumsang 社 (三星電管) で視覚関連の研究をしている人から、突然 ATR を見学したいという申し出があり、韓国交流の気運が (筆者のなかでにわか) に盛り上がったのであった。

去年 (1999年) の6月に、筆者は Chung 教授のいる延世大学 (ソウル) とソウルから約 140 km 南のテジョン (大田) 市郊外にある KAIST (Korea Advanced Institute of Science and Technology) に行き、講演をさせていただいた。「Vertical disparity processing for depth perception」という題目であったが、若手の研究者、大学院生などから非常に鋭い質問があり、彼らの研究に対するモチベーションの高さ、強いエネルギーを感じた。また KAIST で、韓国の脳研究プロジェクトのリーダーである Soo-Young Lee 教授にお会いする機会もあった。ちなみに Chung 教授もこのプロジェクトのメンバーである。Lee 教授によると、韓国でも脳研究は盛んになりつつあり、

大きな予算があるとのことであった。そして、日本と韓国との視覚研究交流をバックアップすることを約束していただいた。

ソウルから KAIST へは Chung 先生の車で行ったのであるが、途中いろいろな話をしながら Chung 先生の人柄に触れることができた。その時、Chung 先生の携帯電話にはしょっちゅうに連絡が入り、それらに楽しそうに対応していたのが印象的であった。Chung 先生はとても世話好きで、韓国の多くの研究者に慕われているようである。延世大学の講演会の後には、Chung 先生の行きつけの店で、Chung 先生や若手視覚研究者たちと「あたりめ」（韓国ではなんとというが知らないが、それはあたりめであった）などを食べながらビールを飲む機会もあった。そして、彼らの視覚研究に対する熱意や研究上の悩みなどを聞き、日本の視覚研究者が思っていることと非常に似通っていることを知った。またこのとき、Chung 先生が今度は韓国の研究者が日本に行くことと約束してくれた。

かくして、視覚学会 2000 年の冬季大会で韓国からお二人の研究者を招いてミニシンポジウムが開かれる運びとなったわけであるが、今後視覚学会と韓国の視覚研究者がどのように研究交流していくかはこれから考えていかなければならない。たとえば、視覚学会を国際学会にして韓国あるいは近隣の国々からも発表者を積極的に受け入れるのも一つであろう。ただ、このためには開催場所や言葉など解決しなければならない問題がいくつかある。しかしこれらの問題は別にして、ただ一つ確かなことは、飛行機でわずか 2 時間の韓国やその他の日本の近隣諸国に視覚研究者がいて、そしてその数は確実に増えつつある、ということである。韓国をはじめとする近隣諸国と研究交流を深めることは日本の視覚研究の発展、ひいては視覚研究の発展につながると思われる。そして視覚学会には近隣諸国の研究交流を率先して進める力があるのではないだろうか。



日本視覚学会 2000 年冬季大会会場にて。左から、齋田 2000 年冬季大会実行委員長、内川本学会会長、Chung 教授、Lee 教授、金子（筆者）。